

あなたは「社会起業家」の道を歩みますか

『社会起業家という仕事 チェンジメーカーⅡ』

—解説に代えて

社会起業家フォーラム

多摩大学大学院教授

田坂広志

いま、この本を読み終わられた、あなた。いま、そのまま目を閉じ、心に思い浮かべてみてください。この本で紹介された一七人の社会起業家。彼らの中で、まず最初に、誰の顔が心に浮かぶでしょうか。

世界中を駆け巡り、多くの著名人の写真を撮り続けてきた渡邊奈々さん。その彼女が撮られた七人のポートレートは、どの写真も、その人物の人柄とともに、内面から輝く何かが伝わってきます。そして、これらの表情は、それぞれに個性的でありながら、誰もが共通に、温かさや優しさ、情熱と意志、そして、不思議な透明感を感じさせます。実は、この本は、そこに書かれている素晴らしい文章以上に、これらの写真を通じて、社会起業家とは何かを、雄弁に伝えてくれています。

では、あなたは、誰の顔が心に浮かんだでしょうか。なぜ、その人の顔が心に浮かんだのでしょうか。そして、その人の生き方のどこに共感を覚えたのでしょうか。その人の働き方のどこに興味を持ったのでしょうか。

もし、あなたが、これからの自分自身の生き方と働き方を考えたいと思えば、この本を読まれたのであれば、そのことを考えてみてください。

なぜなら、それは、あなたに、大切な何かを教えてくれようとしているメッセージかもしれないからです。「これから、どのような生き方と働き方をしていくべきか」「いまの会社、いまの職業を続けていくべきなのか」「どのような仕事を選び、どのような人生を歩むべきなのか」。それは、あなたが抱く、そうした問いに対する、心の奥深くの、もう一人のあなたからのメッセージかもしれません。

しかし、もし、あなたが、そのメッセージに耳を傾けたいのであれば、一つ、大切なことがあります。

「頭で考える」のではなく、「心で感じる」こと。

そのことが大切です。なぜなら、「頭で考えた進路」は、しばしば過ち、そして、後悔をもたらすからです。しかし、「心で感じた道」は、不思議なことに、過たない。そして、後悔しない。

だから、この本は、「社会起業家という職業は、どのような職業か」と頭で考えながら読むのではなく、「社会起業家とは、いかなる生き方と働き方なのか」を、心で感じながら読んでいただきたいのです。

そして、この本の素晴らしさは、登場する一七人の社会起業家の素晴らしさだけでなく、その方々をインタビューする渡邊さん自身が、彼らの生き方に深く共感し、熱い思いを抱き、温かく見つめている、そのことの素晴らしさです。一七人の社会起業家の方々が語る、読者の胸を打ち、心を揺さぶる言葉の数々は、実は、渡邊さんの瑞々しい感性がなければ、それを受け止め、言葉として残すことはできなかったでしょう。

そのことを申し上げたい。もう一度伺いたい。この本を読み終え、あなたは何を感じたでしょうか。あなたの心の中には、どのような声が聞こえているでしょうか。

その声は、もしかすると、次のような声かもしれません。

第一の声は、「自分にはできない」という声です。

「これらの社会起業家の方々は、どなたも素晴らしい活動をしている。それは、尊敬に値する。しかし、それが自分にもできるかと問われれば、自分にはきつとできない。自分には、この人々ほどの強さも信念もないから」。もしかすると、そんな声が聞こえてきた方がいるかもしれません。たしかに、この本で紹介された社会起業家の多くは、強さと信念を持ち、これまで誰もできなかったことを成し遂げてきた。その意味において、深く尊敬に値する人々です。しかし、これらの人々も、最初から強かったわけではありません。また、最初から、深い信念を持っていたわけでもありません。誰もが、自身の内なる声に耳を傾け、最初の一步を踏み出したただけなのです。すると、その一步が、次の一步を呼び、そうして足を進めているうちに、いつか本当の強さを身につけ、深い信念を身につけていったのでしよう。

私は、これまで、社会起業家フォーラム（JSEF）の代表として、また、社会起業家コンテスト（STYLE）の審査員長として、多くの社会起業家の歩みを拝見してきましたが、実は、それが真実と思っています。なぜなら、社会起業家としての歩みとは、「人間としての成長の歩み」に他ならないからです。誰にも、弱さはある。誰にも、迷いはある。しかし、社会起業家は、小さな勇気を持って最初の一步を踏み出すことによって、歩みながら、少しずつ強さと信念を身につけていく。その成長の道を歩み始めるのです。

例えば、インディペンデント・ディプロマット代表のカーン・ロスが、「いまでも外務省の前を通ると、複雑な思いがこみ上げてきてしまう」と語る。その言葉の奥に、彼の心の迷いが伝わってきます。けれども、彼は、その葛藤を繰り返しながら、たしかに、ある強さを身につけているのでしよう。

そして、社会起業家として歩むということは、必ずしも最初から大きな事業をめざして歩み始めることではないのです。例えば、山登りを楽しむ人にも、聳え立つ前人未到の山頂をめざすアルピニストもいれば、身近の小高い山のハイキングを楽しむバックパッカーもいます。社会起業家も、色々な山をめざす人がいて良いのでしょう。大切なことは、小さな山でもよい、まず、目の前の山に登ってみようと思うかどうかではないでしょうか。なぜなら、どのような優れたアルピニストも、最初は、バックパッカーから、その歩みを始めたからです。彼らは、結果として高い山に登った、もしくは、高い山に挑戦することになったのです。

例えば、マンチェスター・ビッドウエル・コーポレーションCEOのビル・ストリックランド。彼は、いまは、明らかにスーパー・アルピニストとされています。しかし、彼の一步は、ただ素朴に「地域の子供たちの夢が育つ空間をつくりたい」という思いを抱き、自宅の地下に陶芸アトリエを作ったところから始まったのです。

第二の声は、「何をやって良いか分からない」という声です。

「自分も社会起業家として歩んでみたいと思っている。しかし、どのようなテーマに取り組みれば良いのか分からない」。そうした声が聞こえた方に申し上げたい。

あなたの「原体験」を見つめていただきたい。原体験とは、あなた自身の人生において、心に深く残っている体験。特に、この社会の在り方について、深い矛盾を感じた体験。その矛盾の中で苦しんでいる人々を見て、深い共感を覚えた体験。そうした体験を原体験として、社会起業家として取り組むテーマを考えていただきたい。

なぜなら、社会起業家の歩みとは、いずれ、現実の矛盾との戦いだからです。それゆえ、社会起業家は、かならず壁に突き当たる。困難に直面する。しかし、そのとき、原体験から発した社会起業家の歩みは、強い。なぜなら、一人の人間が、その人生において得た原体験は、「深い縁」だからです。他の誰の人生でもない、自分の人生の現実において社会の矛盾を深く感じる。その原体験は、困難において、大きな支えとなるからです。「自分の人生を、この問題の解決のために使おう」。「自分には、この問題の解決に取り組む使命がある」。そう思い定めるとき、我々の中から、自分でも想像できなかった力が湧き上がってきます。しかし、ただ抽象的な理念だけから取り組むテーマは、あまり長続きしない。なぜなら、そこに「必然性」が無いからです。その社会起業家にとって、人生の「必然性」が無いからです。

例えば、パラン・パル・ミル代表のカトリーヌ・オンジョレが革新的な里親プログラムに取り組んだのは、彼女自身が強制的に里子に出された、その幼い頃の原体験からです。

しかし、それは、決して「劇的な体験」である必要はない。フローレンスの駒崎弘樹氏の原体験は、身近の出来事を通じて「母親が仕事をする。子供が病気になる。それですべてがおしまい。そんなことはおかしいじゃないか」と感じたこと。そのことに、彼の魂が、何かを深く感じた。それが彼にとっての原体験となったのです。

第三の声は、「いまの仕事を離れられない」という声です。

「できることならば、自分も社会起業家としての道を歩みたい。けれども、現在の仕事にも責任があり、また、家族に対する責任もある。だから、その第一歩を踏み出すことができない」。その声が聞こえてきた方に申し上げたい。

「いまずぐ始められる活動がある」。そのことを理解されるべきでしょう。なぜなら、現代は、ウェブ革命の時代。一昔前と違い、ウェブを使って様々な活動が可能になっているからです。例えば、あなたが取り組みたい社会的問題。その問題に関するウェブサイトを立ち上げ、多くの人々と問題解決のための意見交換をする、智慧を出し合う。問題解決に取り組む人々のネットワークを広げる。ウェブを使って草の根の世論調査を行う。それを、政府、自治体やメディアに伝える。例えば、そうした活動は、現在の仕事や会社を続けながらも、すぐに取り組むことができます。そして、その最初の一步を踏み出すことによって、何かが始まる。何かが変わり始めるのです。

そして、もう一つ理解すべきことがあります。「いまの仕事で学ぶべきことを学ぶ」。そのことが大切です。仮に、いまの仕事が働き甲斐を感じられない仕事であったとしても、仕事であるかぎり、一人のビジネスパーソンとして、一人のプロフェッショナルとして腕を磨くことはできます。だから、この時期に、その腕をしっかりと磨いておく。そのことが、あなたが社会起業家としての歩みを始めるとき、極めて大きな財産になります。逆に、現在の仕事の中で腕を磨くことをせず、社会起業家としての歩みを始めても、現実を変える力を持たない、単なる「ドリーマー」（夢思想家）になってしまいます。

第四の声は、「いまずぐに始めたい」という声です。

「この本を読んで、自分も、いまずぐに社会起業家としての活動を始めたいと思った」その声が聞こえた方は、まず、社会起業家として取り組む事業計画を立てることから始めるべきでしょう。そして、その事業計画は、できるかぎり多くの情報を収集し、様々な人々の智慧を借り、色々な角度から検討したものにすべきでしょう。

しかし、その上で、敢えて申し上げたいことがあります。

「社会起業家に取り組む事業計画は、必ずしも、思う通りには進まない。しかし、必ず、何かに導かれていく」

多くの社会起業家の方々の歩みを見ると、いつも、そのことを思います。

例えば、ビデオ・ボランティア代表のジェシカ・メイベリーの歩み。CNN、フォックスニュースという花形の職業にありながら、その仕事に満足できなかったジェシカは、たまたま耳にしたインドのボランティア活動に参加する。その活動の中で、スターリンクとの運命的とも思える巡り合いを得て、彼女の進むべき道を見出します。

このように、社会起業家の歩みには、一つの不思議なプロセスがあるのです。それは、まさに「導かれる」とでも表現するべきプロセスです。この社会を良きものに変えたいとの思いを心に深く抱き、たった一人であっても、力を尽くして歩む社会起業家は、なぜか、様々な縁に導かれます。深い志や使命感を持って歩んでいると、なぜか、偶然のように見えることに導かれて、仕事が大きなステージ向かっていくのです。

では、「導かれる」ためには、志や使命感に加えて、何が大切か。

「意味を考える」こと、そして「声を聞く」ことです。

例えば、あなたが、一つの計画を立てているとき、その計画とは違う、ある偶然の出来事が起こります。そのとき、「なぜ、こんな計画にもないことが起こったのか」と落胆せず、「このことが起こったのには、きっと深い意味がある。その意味は何か」と考えてみることです。すると、必ず、自分自身の心の奥深くから「声」が聞こえてきます。「これは、きっと、自分にこうしろということなんだ」という声です。

写真家、故・星野道夫氏のエッセイ『イニニク「生命」』の中で、自然保護活動家のシリア・

ハンターが語る、素晴らしい言葉があります。

「Life is what happens to you while you are making other plans.」

社会起業家とは、この言葉の意味を、深く理解する人のことでもあります。そして、「人生は、必ず、何かに導かれている」という信念を持つ人のことでもあります。

では、実際に社会起業家としての歩みを始めたとき、その道を歩み続けるために、何が大切なのでしょう。そのことを、これら一七人の社会起業家は、その姿を通じて教えてくれます。なぜなら、これら一七人は、それぞれ、異なった社会問題に取り組み、異なったスタイルで仕事をしていきますが、実は、深く共通するものを持っているからです。

それは次の三つのことです。

第一は、「多くの人々との出会い」に恵まれているということ。

これらの人々は、誰もが、社会起業家としての歩みの中で、多くの人々に支えられて、その道を歩んできています。もとより、社会起業家とは、資金や組織が無いところから事業に取り組むため、多くの人々が、その事業の周りに集まり、その事業を支えてくれなければ、その志を実現することはできない立場です。

例えば、IBJ代表のカレン・チェは、中国司法省のゴン・シャオピンとの出会いによって、国の犯罪法の整備という、誰もが不可能と思う問題解決への扉を開きます。この出会いの意味は、ゴンが語る、「彼女の大きな涙みない瞳を見ると、本当にそんなことが可能だったという気になってきてしまったんですよ」との言葉が、すべてを語っている。

不思議なことに、我々が、一つの社会的事業をライフワークと思いついて、心に深い志と使命感を抱いて歩むならば、なぜか、その事業を応援してくれる人々が、周りに集まってきてくれるのです。それは、社会に貢献する事業を真摯にライフワークと思いついて定めている人には、人は、力を貸したくなるからです。逆に、世の人々のためのライフワークではなく、自分自身のためのキャリアパスだけを考えている人の周りには、似たような価値観を持った人が集まるだけであり、無償で力になってくれることはありません。

その意味で、社会起業家にとって、心の奥深くに純粋な志や使命感を持つことは、この道を歩み続けていくための、最高のパスポートなのでしょう。

第二は、「恵まれない人々に対する深い共感」を抱いているということ。

これらの社会起業家は、誰もが、恵まれない人々、社会の矛盾に苦しめられている人々に対する深い共感を抱いています。そして、深い共感を抱いているからこそ、その社会起業家の周りには、多くの人々が集まってくれるのでしょう。

しかし、こう述べてると、こんな思いを抱かれる方がいるかもしれません。「自分自身が、この日

本という国で、いま置かれている境遇の中で苦しんでいる。だから、自分には、世界の恵まれない人々を助ける仕事に取り組む余裕はない」

そう思われる方には、気がついていただきたい。いま、この時代に、この日本という国に生きるということは、いったい何を意味しているのか。

それは、「世界で最も恵まれた国に生きる」ということを意味しているのです。なぜなら、①六〇年以上戦争の無い平和な国、②世界第二位の経済を誇る豊かな国、③最先端の科学技術を受受できる国、④高齢化社会が悩みとなるほど国民が健康で長寿の国、⑤国民の大半が高等教育を受けることのできる国。この五つの条件に恵まれた国が、いま、世界にどれほどあるのでしょうか。そのことに気がついたならば、我々は、この日本という国に生まれただけで、すでに「恵まれた人間」であることに気がつくでしょう。そして、「恵まれた人間」には、その境遇に生まれなかった人々に対して為すべき「義務」がある。古くから「ノブリス・オブリージュ」と呼ばれる義務があるのです。社会起業家として歩むということは、その義務を自覚し、それを使命感にまで昇華する歩みでもあります。

こう述べても、まだ、こんな思いを抱かれる方がいるかもしれません。「私は、他人の置かれている状況に対して、この社会起業家の方々ほど、深い共感を持つことはできない」。その方は、「共感」という言葉の、本当の意味を理解されるべきでしょう。

「共感」という言葉の本当の意味は、他者への「憐憫」や「同情」ではありません。その感情は、まだ、「自分」と「他人」の分離が前提になっています。

「共感」とは、目の前の人々の姿が、自分の姿に見えるということなのです。

「自分がこの世に生を受けるとき、ほんの小さな偶然の違いで、自分も、この人と同じ境遇に生まれたかもしれない。そうであるならば、その人の姿は、自分の姿なのではないか」

そうした思いや感情こそが、「共感」という言葉の、本当の意味なのでしょう。

そして、これら一七人の社会起業家が抱く「恵まれない人々に対する共感」とは、まさに、その意味における「共感」なのでしょう。

第三は、「ただ一度の人生を大切に生きたい」との願いを深く抱いていること。

これらの社会起業家の生き方を見て、こう感じる方がいるかもしれません。

「自分は、ここまでの自己犠牲を払って、社会起業家の道を進むことはできない」

しかし、この一七人の社会起業家の方々は、誰一人として「自己」を「犠牲」にしてはいないのです。そうではない。これらの人々は、誰よりも、自分の人生を大切にしているのです。これらの人々は、気がついているのです。我々の人生が、ただ一度かぎりのものであることを。そして、我々は、百年にも満たない一瞬の人生を駆け抜けていく存在であることを。だから、これらの社会起業家の方々は、その「一瞬の人生」を大切にしたいという願いを、誰よりも深く抱いているのです。

例えば、カーン・ロスの語る、「矛盾に目をつぶって、そのまま外交の世界に残るか、または、魂の声に従うか、僕は後者を選んだのです」という言葉は、彼の「自分の人生を大切にしたい」との魂の声でもあるのでしよう。

このように、社会起業家とは、誰よりも自分の人生を大切にしたいとの願いを持っている人々です。必ず終わりがやってくる人生。一度かぎりしか無い人生。いつ終わりがやってくるかわからない人生。その人生を大切にしたいとの、深い願いを持っているのです。

そして、だから、他の人々の人生を、大切にできる。

自分の人生を大切にしたい。その深い願いを持っているからこそ、他の人々も、誰もが、ただ一度かぎりの人生を大切に生きたい、素晴らしい人生にしたいとの精一杯の願いを持っていることが分るのでしよう。

ここまで読まれて、「社会起業家」というものが、いったいどのような仕事であるか、そのことを理解されたでしょうか。

それは単なる一つの「職業」や「職種」ではありません。

それは、まさに、人生の「生き方」と「働き方」に他なりません。

そうであるならば、あなたも、いますぐ、社会起業家としての生き方と働き方をめざし、一步を踏み出すことができるのです。

自分の仕事を通じて、この世の中を少しでも良きものに変えたい。誰かの幸せのために働きたい。その願いを抱いて歩み始めたとき、すでにあなたは社会起業家としての歩みを始めているのです。

そして、その歩みを始めたならば、心の奥深くに、一つの覚悟を抱いていただきたい。

社会起業家の残す「最高の仕事」とは、何か。

その覚悟です。

もとより、社会起業家は、その歩みを通じて、様々な社会貢献と社会変革の仕事を残します。それは、いうまでもなく、素晴らしい仕事です。

しかし、社会起業家が世の中に残すのは、実は、それらの素晴らしい仕事だけではない。

一人の人間が、世の中を少しでも良きものになりたいと願い、精一杯に生きたこと。

そうした思いを持った人々が、巡り合い、互いに共感し、力を合わせて歩んだこと。

そして、その歩みの中で、一人ひとりが、人間として輝き、成長していったこと。

その「後姿」こそが、社会起業家がこの社会に残す「最高の仕事」なのでしよう。

なぜなら、次の世代の人々が、必ず、その後姿を見つめているからです。そして、その人々が、いつか、必ず、その志を受け継ぎ、社会起業家としての道を歩み始めてくれるからです。

そうして、世代を超え、人から人へと受け継がれていくもの。それこそが、この社会を、この世界を、大きく変えていくのでしょうか。

この本を閉じ、もう一度、一七人の社会起業家の後姿を思い出してください。

その後姿は、何年か先の、あなたの後姿に他ならないのです。

著者紹介

田坂広志（たさか ひろし）

1974年、東京大学卒業。81年、東京大学大学院修了。工学博士。87年、米国シンクタンク・バテル記念研究所客員研究員。90年、日本総合研究所の設立に参画。取締役・創発戦略センター所長等を歴任。現在、日本総合研究所フェロー。

2000年、シンクタンク・ソフィアバンクを設立。代表に就任。同年、多摩大学大学院教授に就任。03年、社会起業家フォーラムを設立。代表に就任。著書に『これから何が起ころのか』『プロフェッショナル進化論』『これから働き方はどう変わるのか』『仕事の思想』『なぜ、働くのか』『仕事の報酬とは何か』など多数。

著者へのご意見やご感想は、下記アドレスにお送りください。

個人メールアドレス tasaka@hiroshitasaka.jp

社会起業家フォーラム（Japan Social Entrepreneur Forum / JSEF）

社会起業家フォーラムは、社会起業家の育成と支援を通じて新しい社会の創発を促す「ソシオ・インキュベータ」です。現在、全国各地から12000名の社会起業家が集まり、それぞれの地域や職場で、社会変革をめざして活動をしています。

フォーラム・メンバーは、ベンチャー、中小企業、大企業、NPO、官庁、自治体、教育機関、病院、メディアなど、様々な社会的立場から集まり、また、環境、福祉、医療、教育、文化、芸術、地域、金融など、様々な分野での活動を行っています。

フォーラムの公式サイトやメールマガジンでは、全国のメンバーの活動を紹介し、情報交換と協働の場を提供しています。

（フォーラムサイト・アドレス <http://www.jsef.jp/>）

社会起業家フォーラムへのお問い合わせは、下記の事務局へご連絡ください。

社会起業家フォーラム事務局

シンクタンク・ソフィアバンク内

〒102-0084 東京都千代田区二番町8-7二番町パークフォレスト12階

Tel：03-3288-4861 Fax：03-3288-4863

電子メールアドレス：studio@jsef.jp

本稿は、2007年11月に日経BP社から出版された『社会起業家という仕事 チェンジメーカーII』（渡邊奈々 著）の解説として寄稿されたものです。本稿の著作権は著者に帰属しますが、再配布は自由に行うことができます。